

<社会>を読み解く技法 - 質的調査法への招待 -

北澤 毅 / 古賀正義 編著 福村出版

4章 参与観察法と多声法的エスノグラフィー - 学校調査の経験から

この論文では、まず、「エスノグラフィー」と「参与観察法」の定義、そしてエスノグラフィーのニーズがどのように拡大してきたのかを確認している。そして、今までのエスノグラフィーがもつ問題点を指摘したうえで、多声法的叙述を基盤とした新たなエスノグラフィーの可能性を論じており、筆者が非行問題が多発する「教育困難校」で実際に教師として勤務しながら試みた参与観察を通して、その視点の有効性を考察している。

1. 「エスノグラフィー」と「参与観察法」

「エスノグラフィー」

文化人類学...実際に現地へ赴いて比較的長い間滞在し被調査者と生活を共有しながら、集団や組織の文化を観察する方法

社会学...「参与観察法」

(はじめ) 都市における逸脱集団や下層階層など閉鎖的な社会集団の生活を直接記述する方法

(現在) 社会内部の日常性を支える文化の特質を解釈・記述する方法

定義 by 文化人類学者マリノフスキー(Malinowski,B.)らの古典的理解

「エスノグラフィー」...フィールドワークによる現地体験を通じた「調査プロセス」と、その結果解釈・記述された「モノグラフ」とからなる調査方法

「参与観察法」...実際のフィールドワークにおける主たる技法

参与観察法

観察法...視覚を中心にして調査者が調査対象を直接的に把握し、記述する方法

統制的観察法

非統制的観察法...観察の対象や内容、観察状況などを統制せず、調査対象の解釈や意味づけをできるだけ自然なかたちで観察

非参与観察法...調査者が調査対象者の所属する社会や集団の生活に直接的に参加せず、部外者としての立場から観察を行う方法 *観察されているという意識

参与観察法...調査者が対象者の生活する社会や集団に参加し、対象者たちと共に生活することによって、彼らの視点から対象社会の構造や対象者の解釈過程を観察
(特徴) 日常的・直接的・多面的・包括的・深層的な情報収集

*オーバー・ラポール(与えられた地位や役割に過剰に応じてしまうこと)

*「完全なる参加者」「観察者としての参加者」「参加者としての観察者」「完全なる観察者」

エスノグラフィーへのニーズの拡大

教育社会学において用いられることは、ほとんどなかった
理由1...研究者が閉鎖的な教育現場で教師など組織成員として観察研究を行う機会が限られていた
理由2...量的調査法に比べて非客観的で記述的な研究とされ、「研究論文」として認知されにくい

1980年代後半

量的調査法 一辺倒 質的調査法に対する関心
社会的需要（教育現場での臨床的関心の増大 / 市民運動による現実理解への草の根的欲求）

教育社会学においても...

* クラスルーム・エスノグラフィー（「新しい教育社会学」）

* 生徒文化・学校文化研究（「文化再生産」論）

高校階層構造下の生徒文化と社会階層・ジェンダーなどによる抑圧的文化性との関係

* 学校現場での談話分析（エスノメソドロジー）

教師生徒間における相互作用の構造自体に潜むヘゲモニー（権力的な文化性）の析出

* スクール・エスノグラフィー（比較文化教育論）

日本文花の特質をとりあげ、諸外国との比較によって日本的な学校文化の特質を分析

「現場主義」への要求

現代社会における、多数の個別的な集団の存在により、それに対応した情報チャンネルの極度な分化 研究者にとって、「裏世界」の情報はきわめて獲得しにくい

「現場にもぐり込むこと」を奨励する雰囲気

2. 現状の問題点（ ）と新たなエスノグラフィーへの示唆（ ）

問題点1. 寓話化 (allegory)

フィールドワークで出会う「現実」なるものは、けっして一次元的な「事実」として存在するものでない。あたかも1つの「真実」のように見えるのは、研究者がどこか意図的にその「事実」を再構築していくからにほかならない。

「記述」という行為を通して、重層的な「現実」のなかから、ある「事実」を意図的に切りとり、「寓話化」(allegory)しているのではないか。

これに自覚的でなければならない

「寓話化」を単に分析上の自明の原理とするのではなく、調査の文脈のなかから産出される流動的な「現実」の認識作用そのものとしても呈示することが必要

* 構造主義的な物語分析としてより、状況主義的な物語行為論の視点からの理解

問題点2. リアリズム現想

現場体験の重要性とエスノグラフィー自体の有用性とを安易に同等視する危険性

* 「いきいきとした(live)エスノグラフィー」の神話

「現場主義」の重要性を受容することによって、同時に書かれたエスノグラフィーのリアリズムにノスタルジックな思い入れをし、ある理論なり技法なりを携えて現場にたてば、実際の経験や「現実」に即した記述・分析ができると期待してしまう。

*無自覚なリアリズム信仰

調査の一般的手続きをふんでデータを整理し、仮設発見的なあるいは検証的な調査を目指す研究者
改良主義思考の研究者

...幻想に気付くことなく、それを暗黙の前提すなわち研究のコンテクストとして、現場主義の知見を科学的あるいはイデオロギックな視点から正当化しようと努力しているだけである。

つまり、実際に現場に立った経験と「現実」の理解や記述とは必ずしも連動しない営みである。最悪の場合、エスノグラフィーは、現場体験から情報の欠落あるいは不足しただけの一方向的な記述（モノグラフ）を読者に提供することにさえなりかねない。

エスノグラフィーという方法の意義を再構築すべき

研究者が従来「学門知」をもってしては理解できない事実に遭遇することによって、新たな理解あるいは理論を生み出すチャンスが生じうる。研究者の主体性を強調した「感受概念」の重視や柔軟な「リサーチスタイル（比較法）」の選択。

「科学的客観性」批判

研究者の主観的な解釈に依存し妥当性のない調査である。

*ベッカー(Becker, T) 折衷的な調査方法「分析的帰納法」

「語り」が誰に向けられた主張なのかを確認する必要性

研究者集団のオーディエンス...エスノグラフィーによる作品（テキスト）を自らの学問的文脈に再度位置づけ、そのリアリズムにもとづく知見を改めて支持。「方法」として利用。

問題点3. テキスト作成の意図

ある現場の「現実」を記述するための暗黙の諸前提がある。

きわめて説得的戦略的な「現実」についての記述になりえる。

*すでに埋め込まれた条件 by アメリカの文化人類学者クリフォード(Clifford, J.)

1. 成果を呈示する際にそれが読み込まれる研究の場の「文脈性」
2. 成果を作品として記述する際に使用され容認されている「レトリック」
3. 各学問領域が他のそれとの関係の中で位置付けられている「制度的状況」
4. 小説など文学作品と異なり研究論文として認められる「一般性」
5. 文化のリアリティを感じ取らせる学問的権威を伴った「政治性」
6. これらの条件を規定する広範な「歴史性」

調査者は自分の出会った「現実」から何かを書くのではなく、書きたい「現実」と出会ったのである。

調査者のフィールドにおける調査プロセスを含めた記述そのものが重要な検討の対象になる。

調査の「構成性」

*調査行為の相互関係性 by 社会学者 桜井厚

「調査」という営為は、調査者と被調査者との相互作用そのものであり、一定の状況下でお互いの関心や意図のすり合せ、すなわち交渉過程の中から構成されていくものである。調査者の意図だけが独り歩きできるわけではない。

*「開かれた現実」

相互行為の進行に合わせて、「現実」が新たに構成されていく可能性。

調査者が調査営為の構成する「現実」に参加しているか否かを認識出来ない事が問題。

調査者は、被調査者との「調査」状況下での相互作用のなかでどのような観念が共有されたのか、あるいはどのようなディスコース（対話）が成就しえたのかを絶えず確認するべきである。被調査者とのネゴシエーションのなかから構成されていく「現実」が時間経過のなかでいかに変化していったのかにも意識的でなければならない。

問題点4. 調査者の特権性

「調査者」という立場の特権性。
エスノグラフィーそのものが、他者（被調査者）との関係性を介した、調査者の「自己言及」ときに自己反省という側面をもたざるをえない。

「社会学すること（Doing Sociology）」のスタンスが1つの重要な方法的課題
特権性を相対視していくある種の作業として、フィールドワーク過程を通じた研究者自身の認識変化のプロセスそのものに注目すること

調査者の存在

調査者は他者たちの「声」つまり多種多様な認識を聞き取り、記述のなかで誰かに向けてその「声」を「腹話」していくもの。
研究者の解釈過程が誰の「声」を引用したものであるのかに一層意識的でなければならない。

多声法

個人の認識を形成する多様な他者の「声」の相互関係性を理解するもの。

* 多声法的叙述が求める記述内容 by ロシアの文芸批評家 バフチン(Bakhtin,M.)

1. 外示的な言葉
2. 対象としての言葉
3. 他者の言葉を指向する言葉
 - 「語り手の言葉によって表現された他者の言葉」「隠された内部の論争」
 - 「論争的色彩の自伝」「他者の言表を計算にいれた言表」
 - 「対話の応答」「論争的色彩の対話」

ある特定の他者（調査者）に向けて意識的に語られる社会内部の論争的物語である。

* 事例から

男性若手教師「先生は、どこのクラスで授業もってるの。」

筆者「3年のA.B.E.F.に...です。」

男性若手教師「それはどこも日本史」

筆者「ええ（怪訝そうに応える）。」

男性若手教師「それにしてもおかしいな。担当クラスが、職業科ばかりじゃない。...普通科が飛んでて、農業科と園芸科があるなんて。（だんだん口調が強くなっている）これじゃ教えるの大変だよ。ベテランの先生だって農・園科は苦労しているんだよ。社会科の先生たちがそんなことするわけがないんだがなあ。（首をひねる。）...農・園科の生徒は能力がないから。なんせ『二桁』で入学してきているんだからね...」

* 多声法の応用可能性

テキストの中への書き手自身の侵入とそれによるテキスト内での新たな被調査者との関係性の誘発。エスノグラフィーには、自己の理解と対峙し開かれた「読み」を生み出す「方法的実践」の意義がある。